

無畏註と佛護註との異同について

平野隆

根本中論の諸註疏の中、西藏譯にのみ存し、また西藏所傳に於て龍樹自註と稱せらるる無畏註 *Akuto bhaya* と、同じく西藏譯のみに存する佛護中論註 *Buddhapālita-mūlamādhyamaka-vṛtti* との第二十三觀顛倒品以下第二十七品に至る五章は寫誤によると思はる僅かな相違を除いて全く同一であつて、恐らくは原本を一にするであらう。以下この問題の外形的觀察の結果を略述する。

先づ最初に北京版による兩註の分量を比較すれば、全體では約一三八枚（佛護）と約八〇枚（無畏）であり、第二十三品以下の同一の部分を除いた第二十二品までは佛護註が無畏註の約二倍（一二三枚と六五枚）に上り、註釋としては佛護註の方が遙に詳細であると言ひ得るのである。無畏註には故池田澄達氏がその無畏論和譯（東洋文庫論叢一六）緒言の中に指摘せられた如く、偈頌そのままと云ふべき註釋が數多く存する。第二品第五偈を例出すれば、

*bgom-la ḥgro-ba yod-na ni/
ḥgro-ba gñis-su aṭhal-ḥgyute/
/gaṅ-gis bgom-pa de-dan ni/
/de-la ḥgro-ba gaṅ-yin-paḥo/
ḥdi-la bgom-pa-la ḥgro-ba yod-par ḥdod-na/ḥgro-ba gñis-su
thal-bar ḥgyur-te/ jiṭa-she-na, ḥgro-ba gaṅ-gis bgom pa shes*

*brjod-pa de-dan-de-la, yan ḥgro-ba-ḥgyur-ba gaṅ-yin-paḥo/
「去時に去あらば、二の去となるべし。それによりて去時あるものと、それにある去なり。」*

ここに去時に去ありといはば、二の去となるべし。何となれば、去によりて去時ありといふものと、それにある去なり。

右の如く、長行には音韻の關係から偈頌に省略せられた助辭などが附加せられたにすぎず、和譯すれば共に同一となる類である。さりとてこれを以て註釋を價值なしと簡単に決定することは出来ない。

池田氏はこのことを以て、無畏註の龍樹自註說否定の依據となされるのであるが、しかく簡単に論定することは妥當であると思はれない。そこには梵語の原形と西藏譯との關連を仔細に吟味する必要があるであらう。孰れにせよ無畏註にはこの様な簡略な註釋が數多く存するのであるが、第二十二品までの佛護註にはその様なものは見られない如くである（但しこれは第十三—二十一品を未審のままの推測であるが）。

尙第二十三品もその第十六偈までは他に比して數多くの相違點が認められる。この十六偈を分類すれば次の如くである。

- (一) 同一のもの 七偈（1、2、5、7、8、9、13）
- (二) 佛護が簡略 五偈（3、12、14、15、16）

(三)異なるもの 四偈(4、6、10、11)

この中(一)の同一のものはすべて長行が偈頌そのままの形態のものである。(二)の佛護註の方が無畏註よりも簡略となるものとは、次に第三偈を例示して兩者を比較してみよう。

「我の有性と無性とは云何にするも成ずることなし。これを離れて諸煩惱の有性と無性とは云何が成ぜん。」

若し貪等の煩惱の所依を我なりと云はば、これに依る諸煩惱もありと分別せらるべし。されど我の有性と無性とは云何にするも全く成ずるものに非ず。我なければ諸煩惱の有性と無性とは云何が成ぜん。即ち成ぜず。

右は無畏註の所言であつて、傍線の部分が佛護註である。即ち佛護註は無畏註に附せられた註釋の語句をすべて省略し、偈ののべき的な語句のみを残すことは一見して明らかである。他の偈もこれと同様である故に、十六偈の中で十二偈までが佛護註では偈頌そのままと云ふことになる。

次に相異なるものとして第四偈を比較すれば、

無畏 (池田譯)

佛護

「これら諸煩惱は誰の所有なりや、其人も亦成ぜず。たとひ其人を離れて誰かあるとするも、少分の煩惱もあることなし。」

「これら煩惱は誰の所有なりや、其人も亦成ぜず」(a—b)これらの煩惱を所有するその我は畢竟じて成ずるものに非ず。

これら煩惱を所有するその我は畢竟じて成ずるものに非ず。若し云何なる我もあるこ

「たとひ其人を離れて誰かあるとするも少分の煩惱もあることなし」(c—d)

無畏註と佛護註との異同について(平野)

となくば、云何なる煩惱あり。若し云何なる我も……(以下同じ)……。

即ち、佛護註が偈を分割すると云ふ相違があるのみであつて、文言には些も異なる所はない。第六偈も語の配置が少し相違するにすぎない。第十・十一偈に於ける兩註の相違はこれらに比較すれば大であるが、それは恐らく寫誤によるものであらう。デリゲ版と對照するときは北京版と可成の相違あるも、北京版佛護註の方がデリゲ版に近似である。池田氏もこの箇所はデリゲ版に據て和譯せられたのであるから、氏の使用せられた版本も相當の錯亂あつたことと推察せられる。従つてこの二偈に於ける兩註の相違は問題とならない。この様に第十六偈までに相違あるとは云へ、それは極めて些細であつて、何ら根本的なもののないことは明らかである。

尙第十五偈の釋中に、無畏註には「觀如來品中に廣說せられたり」とあるが、佛護註ではそれが「觀去來品」とある。意義の上から見ても「如來品」が妥當であつて、青目註もこれを「如來品」とする。恐らく *tejāsvara* を *śāśvara* と見誤りたることによるのであらう。

第十七偈以下第二十七品に至る部分に於ては文の切り方、或は寫誤による相違などが點在する程度であつて、兩註が原本を一にすることは些も疑問の餘地がない。ただ顯著な相違として氣付かることに譬喩の有無がある。即ち無畏註には大半の章の末尾に譬喩が置かれてゐるに對し、佛護註はそれを一切除外し、第二十三品以下に於てすら省略せられてゐることである。これらの喩の中には文脈の上から見て適切なるもののある反面、なくもがなものもあり、殊に第四品、第二十七品などは全く必要な所に強ひて附會せられた

無畏註と佛護註との異同について（平野）

觀あつて、後世の附加ならずやと思はれる。

現存の佛護註にも後世の附加あることは、その序品冒頭の歸敬偈中に、「軌範師大德佛護に稽首禮す」と云ふ作者自身への歸敬の言葉あることよりして明らかである。これと同じことは異部宗輪論序偈に「世友大菩薩云々」と云ふ著者自讃の句があるが、この言葉が宇井博士（印哲研究Ⅱ八三頁）に依りて後世の附加とせられたことと相應すると思はれるからである。

然しその様に附加あるとは云へ、第一品中には月稱中論釋に佛護の所論として引用せらるる語句の若干が見出され、その點に於て佛護作と云ふことに疑問の餘地はないと思はれる。又詳細な検討を経てゐないので斷定し得ないが、第一品には中論偈（十ノ三、十四ノ五）、及び四百論偈三偈（一五〇、二〇〇、他一不明）が、又第十二品にも中論偈二偈（二十四ノ八、十）、四百論偈二偈（三九八、他一不明）が夫々引用せらるるのみで、他の論書よりの引用は全く見られないことに氣付かれる。これに依つて、第一品と第二十二品とは形態の點に於て一應相似であると思ふことも可能であらう。この様な論の體裁、或は又第二十二品と第二十三品とを對比した場合、無畏註では兩品が形態的に見て大差なく連續的であるのに、佛護註の方は第二十二品の詳細より第二十三品の簡略への變化が極めて顯著であること、このことは先に述べた如く第二十二品までに全く見られない偈のべ書的な註釋が第二十三品以下の大半を占むることよりしても容易に察知せらるる所であるが、これらの事實により佛護註が第二十二品までと第二十三品以下とに劃然と區分せられ、第二十二品までを佛護作と爲すことは一應許されるであらう。右の考察の結果として引出さるるのは、佛護註第二十三品以下が

後世の附加なること、及びそれが無畏註第二十三品以下と原本を一にすることである。獨斷的な推測が許されるならば、佛護註第二十三品以下は佛護が製作しなかつたか、或は傳承の途中に失はれたのを無畏註より借りてこれを完本と爲したと云ひ得るであらう。

この様な問題を決定するには詳細な内容の検討を必要とするのであるが、今はただ外形を概觀することに依りて無畏註と佛護註との第二十三品以下が同一であることを指摘するに止むることとする。

1 試に北京版を所依とした寺本譯の無畏註第十偈（大谷學報第十六卷三號一三二—三頁）を例示すれば次の如くである。

「何に能依して不淨と淨とを施設せらるるや。不淨に觀待せずして〔淨〕有ることなきが故に。不淨は認むべからず」。

不淨は何に能依して淨と不淨とを施設せらるるや。不淨に觀待せざる前に於て有ることなきが故にそれ故に。不淨は認むることあらず。

ここには梵文の中論本偈に見らるる如き淨と不淨との相依性に關する明快な論理は見失はれてしまつて、梵文の意味する所が全く表はされてゐない。西藏譯が拙劣なるか、或は寫誤によるのであらう。

2 第四品の「此品最後の二偈は一切の空論に於ける核心なりと觀るべし。ガンダルバ城の空なるが如し」、或は第二十七品の「憐愍を持して一切のを見を斷ぜんがために……（中略）……大聖瞿曇に我れは歸命し奉る。例へば菩薩難陀伽（Bodhisattva-nantaka）の如くに。」などの譬喩は全く意味をなさず、前後の關係を考へることなしに、ただ機械的に、前にならつて附加せられたものとししか考へられない。